

 B. 各支部から

佐賀県の現状と将来

佐賀県小児保健協会支部長
佐賀整肢学園こども発達医療センター

田 崎 考

私が佐賀県支部を設立された宮崎教授から受け継ぎまして13年になります。この間に行ってきたことを述べながら、これからの問題提起をしてみたいと思います。

これまで行ってきた中で柱としていることは、県の小児保健大会を独自の行事として行っていること、その報告書として佐賀県小児保健研究を毎年発行してきたこと、小児生活習慣病予防研究会を県医師会学校医部会と共催で行い、その内容を会誌に載せていることの3項目になります。

佐賀県小児保健大会はこれまで小児科学会の地方会と合同という形で行われていましたが医師以外の参加が少なく、演題も出ない状態でした。小児保健大会として独立した会にして、一般演題と特別講演(シンポ)の形式にしていますが一般演題が少なくなり、シンポだけになってしまいました。この形で数年続けました。昨年は一般演題だけにして優秀演題賞を設けましたら、演題数は増えましたが今年はまた少なく、急遽役員に発表を依頼する状態でした。演題募集を早めて役員による演題募集も必要と考えています。

小児期からの生活習慣病予防健診も佐賀で始めてから20年を超えていますが、なかなか発展しません。学校保健で行う法的なしばりを得ていませんので学校、行政の協力がなかなか得られないのが現状です。学校医部会との共催の形を取って研究会を始めるこ

とはできましたが出席する人は限られてきておりません。

これまでやってきて感じたことは、中心になる人はある程度長期間続けられる人か組織であること、長い目で見た組織づくりが大切であることを痛感しています。今は行政レベルが財源不足でいろいろな面で縮小体制にあり、人事異動があることで長く続けられる人ができにくい体制があります。また大学等の教育・研究施設でも人の問題は大きく、全国的に見ましても支部が大学を離れたところも増えているようです。ただ乳幼児から思春期まで取り扱う幅広い部門ですから幼児を含めた学校教育の施設では荷が重くなりそうです。どのような施設、機関が行うにしても小児保健に興味を持ち、時間的にも可能な人が中心になって動かないといけない気がしています。

これはどこでも言えることですが会に如何にして人を集めることができるかも大きな問題です。最近では学会、研究会の数も増え、いろいろな講演会が地方でも、月によっては目白押しの状態です。インターネットを利用すれば情報も容易に手に入る時代です。多くの人に、多職種の人にどのようなテーマ、講師を選べば興味、関心を持ってもらえるか主催者として悩むことはどこでも同じだと思います。これからも自分でできる間は努力してみたいと思っておりますが後を育てる時期になったと感じています。